

完熟栽培温州みかんの隔年結果防止対策							
<p>【要約】 完熟栽培を行った温州みかんは、翌年の結果母枝の糖含量が不足して隔年結果しやすくなるが、春先から摘蕾を実施し、慣行収穫期には一定量を収穫することにより翌年の着花数を確保できる。</p>							
園芸研究所・果樹部・常緑果樹研究室						連絡先	092-922-4111
部会名	園芸	専門	栽培	対象	果樹類	分類	普及

#### 【背景・ねらい】

温州みかんの完熟栽培は低コストで効果的な高品質果実生産技術であるが、着果期間が長期となるため隔年結果を生じて収量が不安定となりやすい。このため完熟温州みかんの安定生産を目的に、完熟栽培樹の樹体内成分について調査し、着果管理を主体とした隔年結果防止対策について検討する。

#### 【成果の内容・特徴】

- ①完熟栽培を行った温州みかん樹は、完熟栽培を行わない対照樹に比べて結果母枝内の糖含量が低下しやすい。特に完熟栽培樹内では、2月まで着果させて完熟収穫を行った側枝の結果母枝で糖含量の低下が著しく、翌年の着花数も減少するが、摘蕾を行った側枝では着花数が確保できる（図1、表1）。
- ②完熟栽培を行わない対照樹に比べて、完熟栽培を行った樹では翌年の着果率が低下しやすく、着果数が少なくなるが、摘蕾や慣行収穫を行った側枝では翌年の着果数が確保される（表2）。
- ③以上の結果から、完熟栽培を行う温州みかん樹では、あらかじめ全摘蕾または全摘果を行った側枝を樹内に20%程度配置することにより、翌年の着果数が確保できる。

#### 【成果の活用面・留意点】

- ①全ての果実を完熟果として残さず、慣行収穫期に7割以上の果実を収穫し、完熟には品質の向上しやすい小玉果（S級主体）を残す。
- ②完熟を行った樹では翌年の着果率が低下しやすいため、発芽～開花期に液肥の葉面散布等の着果向上対策を講じる必要がある。

[具体的データ]

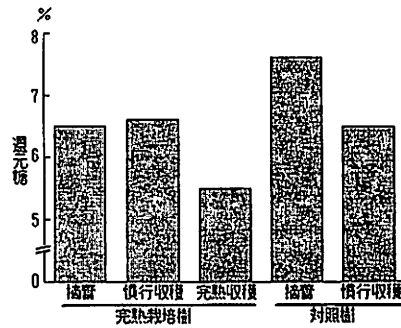


図1 完熟栽培樹における着果管理法と結果母枝の成分 (平成 3年)

表1 完熟栽培樹における側枝の着果管理法と翌年の着花及び生育 (平成3~4年)

着果管理法	側枝基部径 (mm)	翌年の着花及び生育 (側枝当たり)				
		有葉花 (花)	直花 (花)	花計 (花)	新葉数 (枚)	新梢数 (本)
摘蓄	13.2	32	135	167	147	21
慣行収穫(11月)	15.5	12	76	88	197	36
完熟収穫(2月)	15.9	9	52	61	224	42

注) 品種は興津早生

表2 完熟栽培樹における側枝の着果管理法と翌年の着果 (平成3~4年)

樹の区別	着果管理法	側枝基部径 (mm)	3年の着果		4年の着果		
			着果数 (果)	着果量 (kg)	着果数 (果)	着果率 (%)	葉果比
完熟樹	摘蓄	15.3	0	0	13.3	4.9	41
	慣行収穫(11月)	15.4	12.1	1.3	3.1	6.5	151
	完熟収穫(2月)	15.3	11.8	0.9	0.9	6.9	508
対照樹	摘蓄	15.9	0	0	14.9	8.1	32
	慣行収穫(11月)	14.3	12.8	1.3	5.5	16.7	63

注) ①品種は興津早生

②着果数及び着果量は側枝当たりの数

[その他]

研究課題名: カンキツ果実品質の時期的変化

予算区分: 経常

研究期間: 平成4年度 (平成2~4年)

研究担当者: 矢羽田第二郎、大庭義材、桑原実

発表論文等: 平成2~4年度園芸研究所果樹部常緑果樹研究室試験成績書